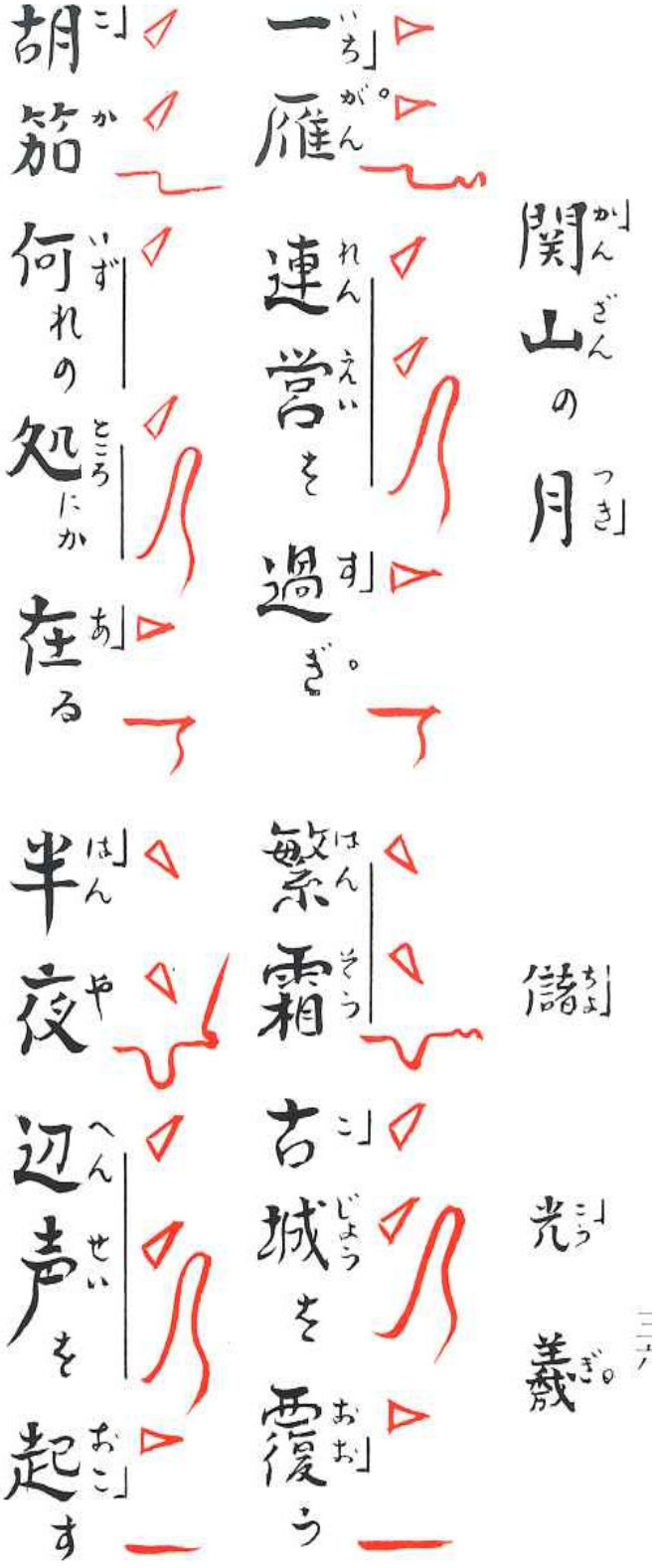

【作者】儲光羲（七〇六年？～七六三？）盛唐の詩人。兗州（えんしゅう）（現・山東省兗州）の人。七二六年の進士。監察御史となったが、安禄山が長安を陥とした時に強要されて官に就いたため、乱後は嶺南（現・広東省）に流され、その地で没する。

【語釈】＊関山月…楽府題。「郷里の月影」「関となる要害の山にのぼる月影」の意。　＊関山…関所と山。関所のある山。国境にある山々。
＊連営…とりでをつらねる。連なり続いているとりで。　＊繁霜…たくさん降った霜。　＊胡笳…北方（西方）の異民族の吹いた木製の笛
＊半夜…よなか。夜半。　＊辺声…辺疆独特の物音。辺境の地の馬の嘶き、羌笛、角笛などの音声。

【通釈】一羽の雁（がん）が、遥か彼方にある連なり続いているとりでを飛んで過ぎて行き。たくさん降った霜が、自分の（作者）の居る古い街（まち）を覆（おお）った。異民族の吹く葦笛が、どこにあって（＝どこからか）夜中に辺境の音色（ねいろ）を起こして伝えてきているのだろうか。